

「神に取り扱われて」創世記44：1-34 12・7・8 ある人が「私は罪人だと頭では理解できるのですが、心ではわからないのです。どうすればよいのでしょうか」と尋ねた。その時、尋ねられた人は、「罪をわからせて下さい、と神に祈り続けましょう。私も祈ります」と答えられたそうである。その後、祈りはその人を神のみもとに導き、その人はしばらくして、はっきりと罪を悟り、また自分の為に主が十字架についてくださった事を信じ、罪が赦されたという確信を持つ人に変えられたそうである。本当の意味で罪がわかるとは、どういうことだろうか。聖なる神の聖さに触れ、主の御言葉の光に照らされて、自分の中に罪があると気づかされる。それは、御聖霊のわざである。醜い罪が自分の中にある事を示され正しく苦しむ。聖なる神の前で、さばきがあることを思い苦しむ。「罪から来る報酬は死です」（ローマ6：23）と言われている。いつか、さばきの座に立たされて申し開きをしなければならない。それは明日であるかもしれない。その時まで罪の解決をしておく必要がある。そのように、自分の罪を認める経験が私達に必要。そのプロセスを通して、主の十字架によって、自分の数えきれない罪が赦される恵みの素晴らしさがわかる。大切な事は、聖なる神の臨在に触れ、罪に苦しみ、告白し神に赦される。これが、救いの経験。神の前に自分の罪を悲しみ苦しむ経験、悔い改めず平安のない時を過ごし、神に立ち返る経験、これらは、貴重な経験である。ヨセフの兄弟達は、以前弟のヨセフをねたみ、殺そうとまで考え、エジプトに売り飛ばした。ヨセフの着ていた服を動物の血で染めて、父に見せ、野獣に引き裂かれたように見せかけた。しかし父の嘆く姿を見て、兄弟達は事の重大さを知る。次第に罪に苦しみ始める。その事を忘れようと思っても、いつも脳裏をかすめる。心が責められる。心を紛らわせようとしても楽しめない。その苦しみは、単に良心の責めだけではなく、すべてを見て知っておられる神にさばかれている事を感じるようになる。「神がしもべどもの咎をあばかれたのです」：16。解放されて、自由になりたいと思っている。しかし、ヨセフは、どこに行ってしまったかわからない。死んでいるかも。取り返しのつかない罪。一生この苦しみを負い、生涯隠し続けなければならない。エジプトの大臣のような存在になっているヨセフの前に立たされ、弟は知らずに顔を地に伏せている兄弟達。：14。今度は盗みの疑いをかけられた。ヨセフには特別の考えがあったのだろう。父ヤコブが一番心配していた事が起こる。ベニヤミンに嫌疑がかけられ、彼が捕えられようとしている。最愛の息子の一人が、また父親から引き離されようとしている。兄弟達にとって自分の身に不幸が起こるのであれば耐えられるかもしれない。16節のユダの「神がしもべどもの咎をあばかれたのです」の言葉は、自分達がヨセフを虐待し、売り飛ばした罪の事を意識したものと思われる。それ故に彼は「今このとおり、私たちも、

そして杯を持っているのを見つけた者も、あなたさまの奴隷となりましょう」：16
と言う。兄弟全員が神の前に罪ある者との気持ち。ここには兄弟達の罪責の苦しみが記録されている。事実「神がしもべどもの咎をあばかれたのです」という告白通り。罪に対して神は正しく徹底的に取り扱われる。罪がある時、神はそのままで良しとされる方ではない。義と愛をもってお取り扱いになる。神の前から逃れるられない。ユダは立ち上がる。「私が今、あなたのしもべである私の父のもとへ帰ったとき、あの子が私たちといっしょにいなかったら、父のいのちは彼のいのちにかかっているのですから、あの子がいないを見たら、父は死んでしまうでしょう」と訴える。：30, 31。：33では「このしもべを、あの子の代わりに、あなたさまの奴隷としてとどめ、あの子を兄弟たちと帰らせてください」とまで言う。もはや父親の不公平な扱いに怒り、嫉妬したかつてのユダではない。自分の事だけを考え、不当に扱われる時に憤っていた心の狭いユダではない。年老いた父の気持ちがわかるようになって来ている。ベニヤミンがヨセフのように特別に愛されているとしても、嫉妬することもなくなっている。むしろ、この父の気持ちに配慮しようとしている。父の苦しみと痛みがわかるようになって来ている。「私の父に起こるわざわざいを見たくありません」と言う。：34。罪に苦しみ、罪を悔いる者の姿。罪を知り、その本当の罪深さを味わう者が、そのようにして神に取り扱われている。自分の罪の苦しみが分かる時、他の人が罪に苦しむ時、寛容になり優しくなれる。自分の罪を悲しみ苦しむ事は、神の救いと聖さに近づく恵み。「神のみこころに添ったその悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか」(Ⅱコリ7：10, 11)とある。神の御心に添った自分自身の罪を悲しむ悲しみは、悔いのない、救い、つまり、神に立ち返り、神に自分の罪を告白し、神に赦され、神との素晴らしい関係を回復するという恵みをいただく。しかし、世の悲しみは、自分の悲しみを神のもとに持って行かず自分を又は他人を責め続ける。それは死(肉体的な死、永遠に神から離れたままの滅び)をもたらす。神の御心に添って自分の罪を悲しみ、悔い改め、神に赦される恵みは、私達の心に、聖なる熱い心を与え神に従う者とする。神は、私達が自分の罪をごまかさず、隠さず、自分の罪を正しく悲しみ、神のもとに赦しときよめを求めてやって来るのを忍耐深く待っておられる。神のもとに行こう。「あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」Ⅱペテ3：9。「私たちが自分の罪を言い表すなら…その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」Ⅰヨハネ1：9